View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学習システム促進研究センター
『学習システム研究』創刊号　2015(pp.16-29)

大学院生の学習システムとしての GTA の体系とその意義

―クリス・パーク論文が教育学研究者・教師教育者の育成に示唆するもの―

渡邉 巧・大坂 遊・草原 和博

本研究は，①大学院生は，GTA としてどのようなつまずきに直面するのか，②つまずきの克服は，どのような仕組みで支援することが可能か，③とくに教科教育学を専門とする大学院生にとって，GTA の経験はどのような意味を持つのか，を解明することを目的とする。この問いを解くために，クリス・パーク（Chris Park）が執筆した“The Graduate Teaching Assistant（GTA）: Lessons from North American Experience.”「大学院生ティーチング・アシスタント（GTA）－北米の経験からの教訓－」を検討する。本論文は，2014 年 9 月，シェリー・フィールドが RIDLS 主催の講演会に登壇した際，北米の GTA 研究の動向を概観できる有益な資料として紹介したもので，事実，多くの先行研究者が引用，参照する包括的なレビューとなっている。そこで本稿では，パーク論文を解題することで，上の問いにアプローチすることとした。パーク論文の分析から明らかになったのは，以下の 3 点である。①大学院生は，GTA として，「他者との関係構築」「研究と教育の時間配分」「知識や経験の不足」「自分とは異なる多様な考えに開かれた姿勢を示すこと」でつまずく傾向にある。②GTA が直面する困難を克服するプログラムは，GTA 制度に他ならない。そのための GTA プログラムは，研究者・教育者のコミュニティへの正統的周辺参加の機会を提供するものでなくてはならない。また首尾一貫した「選定と養成」「トレーニング」「指導・助言とメンタリング」の仕組みづくりが要求される。③GTA の経験は，教育者（教員養成者）としての資質・能力に限らず，研究者ならびに教育者（教員研修者）としての資質・能力を高める契機ともなる。教育者と研究者それぞれの方法論が深く分かちがたく結びついている教科教育学を専門とする大学院生にとって，GTA としての学びには一定の効果が期待できる。
キーワード：大学院生の学習，Graduate Teaching Assistant（GTA），教科教育，教育学研究者，教師教育者

Graduate Teaching Assistant Work as a Learning System and its Significance:

The Lessons of Chris Park’s Article for Pedagogy Researchers and Teacher Educators

Takumi Watanabe, Yu Osaka and Kazuhiro Kusahara

This study aims to elucidate（1）the setbacks graduate students face as Graduate Teaching Assistants（GTAs）,（2）the mechanisms through which overcoming these setbacks is possible, and（3）the meaning of the GTA experience, particularly for graduate students specializing in subject education. To answer these questions, we consider Chris Park’s article “The Graduate Teaching Assistant（GTA）: Lessons from North American Experience.”

This study was introduced by Sherry Field when she took the podium at the RIDLS lecture meeting as a beneficial reference that provides an overview of North American trends in GTA research. Indeed, it is a comprehensive review that has been quoted and consulted by many previous studies. Thus, for this study we decided to approach the above questions by reviewing Park's article. The following three points became clear from this analysis. First, as GTAs, graduate students tend to suffer setbacks in terms of constructing relationships with others, allocating time between research and education, inadequate knowledge and experience, and demonstrating an open attitude toward diverse ideas that differ from their own. Second, it is none other than the GTA system itself that can overcome difficulties GTAs face. A GTA program for this purpose must offer opportunities for legitimate peripheral participation in a community of researchers and educators. Furthermore, there is need for coherent selection and preparation, training, and supervision and mentoring mechanisms. Third, the GTA experience is an opportunity for heightening not only capacities and abilities as educators（teacher trainers）, but capacities as researchers and educators（teachers in training）. For graduate students specializing in subject education（one in which the methodologies of educators and researchers are closely connected）, learning as a GTA can be expected to be effective.
Key Words: Learning of Graduate Students, Graduate Teaching Assistant（GTA）, Curriculum and Instruction, Pedagogy Researchers, Teacher Educators

Ⅰ　問題の所在

博士課程の大学院生たちは，将来，研究者になっていく。それと同時に大学や地域における教育者としての役割も担うことになる。後述する通り，教育学・教科教育学の大学院生ならば，なおさらこれらの役割を一体的に担うこととなる。

しかし，大学院の教育プログラムが，これらの役割を意図的計画的に育成してきたかというと，必ずしもそうではない。日本の高等教育機関では,「徒弟制」とも評されるように，指導教員や先輩の後ろ姿を見て，同期と切磋琢磨させることで，研究，教育，事務に関わる資質･能力を結果的に身につけさせてきた。こうした研究室や講座に閉ざされた徒弟的な学びの課題は，教育学の文脈で既に池野（2014a）によって指摘されている。大学院生には，研究室や講座の壁を越えて，広く了解された一定の規準(到達水準)にもとづいて，研究者・教育者としての資質・能力を育成していくことが課題となっていよう。

我が国において，大学院生に教育者と研究者としての資質・能力を組織的に育成することも意識して導入されたのが, TA の制度だった（子安･藤田, 1996)。しかし, 子安他（1997）によれば，実際の制度やその運用には不十分さが残ったと言う。

我が国における TA 研究は，このような TA 制度の定着と格率をめぐる課題を受けて発展してきており，それらは大きく 2 つのタイプに大別できるだろう。

第 1 に，TA の制度や運用の事実，大学院生にとっての意義に関する研究である。例えば，河井（2000），北野（2002），（2003），玉村・向後（2008）などが代表的な成果であり，TA が授業の改善や大学院生の教育力を高める上で効果があることを示しつつ，未だ制度面を中心に課題が存在することを指摘している。

第 2 は，TA 制度の先進的な取組を分析した研究である。例えば，宇田川（2006），今野・三石（2008），吉良・北野（2008），吉良（2014）らが挙げられる。とくに，吉良（2014）は，米国の先行研究や TA 制度を包括的に分析した上で，TA 育成の三段階，すなわち，「新任 TA」，新任 TA のメンタリングを行う「ベテラン TA」，本格的な「将来の大学教員」としての準備段階, を提案している点で示唆に富む。

日本の TA 制度を対象化した研究では，北野秋男のグループや小笠原正明らの北海道大学のグループの活躍が注目される。北海道大学と筑波大学は，米国や中国，韓国の大学と行った共同研究の成果を『プロフェッショナル・ディベロップメントー大学教員・TA 研修の国際比較ー』にまとめ，出版している。執筆者には, TA 研究の第一人者であるワシントン大学のジョディ・D・ナイキスト（Jody D. Nyquist）を始めとして，K・リン・テイラー（K.Lynn Taylor）やリンダ・フォンヘーネ（Linda von Hoene）らが名を連ねており注目される。

このように我が国の TA 研究は，大学院生の研究・教育力の向上のために，あるいは後述するように大学院生への経済的支援のために，米国の TA 制度をいかに導入し，自立的に再構築していくかという文脈で議論されてきた。このような日本での議論はヨーロッパでも行われていたようで, とくに英国で TA 制度の確立に努め，その包括的なレビューゆえに，上述のテイラーや吉良らにも参照・引用されてきたのが，本稿で取り上げるクリス・パーク（Chris Park）と, 彼が執筆した論文“The Graduate Teaching Assistant（GTA）: Lessons from North American Experience.”「大学院生ティーチング・アシスタント（GTA）ー北米の経験からの教訓ー」であった。

刊行は 2004 年であり，Teaching in Higher Education の Vol.9，No.3 に所収されているー以下，本論文をパーク論文または対象論文と表現する。また大学院生による TA を，パーク論文にならって GTA と表記するー。

本稿では GTA 研究の一つの到達点と解され，我が国の研究史とも問題意識の重なるパーク論文の解題を行う。解題を通して，大学院生の研究者，教育者としての資質・能力の育成に係わる以下の問いを明らかにすることを目的とする。

① 大学院生は，GTA として学習する過程で，どのようなつまずきに直面するか。
② つまずきの克服は，どのようなプログラムで支援することが可能か。
③ とくに（教育の）研究者と（教師の）教育者の２つの顔をもち，両者の責任を同時に果たすことが求められる教科教育学を専門とする大学院生にとって，GTA の経験はどういう意味を持つか。

なお，パーク論文が執筆された背景は，今日の日本の研究系大学が直面している状況と大きく重なる。パーク論文の提案は，高等教育改革の文脈で日本に示唆するところも大きいのではないか。

Ⅱ　対象論文と執筆者の紹介

１．論文選定の個別的背景

学習システム促進研究センター（RIDLS）は，2014 年 9 月 18 日に教員養成課程における TA の活用をテーマとした講演会を開催した [1)]。講師には，アーカンソー工科大学教育学部長のシェリー・フィールド(Sherry Field）とアパラチア州立大学講師のエリザベス・ベローズ（Elizabeth Bellows）を招聘した。

両氏は，かつて在籍したテキサス大学オースチン校教育学部において，指導教員と指導学生・GTA の関係にあった [2)]。

フィールドは，社会科教師教育研究や初等社会科カリキュラム研究を専門とする。講演会では，同校の GTA 制度とその運用に関して詳細な説明が行われた。一方，ベローズは，GTA に従事した個人的な経験にもとづいて，その成果と意義が報告された。この講演会で，米国の GTA 制度を大観できる参考資料として紹介されたのが，パーク論文であった。

パーク論文は，英国の高等教育改革のために「北米の GTA 活用に関する既刊文献をレビューし，重要な教訓を明らかに」した英国の関係者を主なターゲットにした論文である [3)]。しかし，その包括的で的確な解説ゆえに，米国でも一定の評価が与えられていることが推察できる。

２．執筆者の紹介

執筆者のクリス・パークは，自然地理学を専門とする研究者である。とくに環境地理学と経済地理学に関する研究で知られる。2015 年現在では第一線を引退し，英国のランカスター大学の名誉教授を務めている。

パークは，数多くの書籍や学術論文を執筆しており，その領域は，自然地理学，宗教学，高等教育に及ぶ。1990 年代には，地理学を中心に，熱帯雨林，酸性雨，環境破壊に関する研究成果を発表してきた。その内，熱帯雨林に関する著書の Tropical Rainforests は，犬井正によって 1994 年に『熱帯雨林の社会経済学』として邦訳され，農林統計協会から出版されている。また環境地理学分野の辞典 Dictionary of Environment and Conservation の編纂も行っている。多くの書籍が再版を重ね，広く研究成果が受容されている。

2000 年代に入ると，問題関心が高等教育に広がり，多くの論文を執筆した。このような問題関心の広がりには，大学院での研究・教育や経営に関わる経験に加えて，高等教育質保証機構（HEA）や高等教育アカデミー（QAA）での勤務の影響が考えられる。

実際，パークのホームページに掲載された業績一覧を眺めると，博士号や大学院生に関する研究が少なくない。とりわけ英国の GTA 制度の意味をパークが所属するランカスター大学を事例に検討した論文“The Donkey in the Department? Insights into the Graduate Teaching Assistant(GTA)experience in the UK（2002）“は，

本稿の問題意識とも重なり，興味深い。本論文では，GTA の役割やフレームワークに関する全英的な議論を呼びかけるとともに，英国の研究大学（research-led UK University）における GTA 育成のあり方を問うている。この論文については，稿を改めて検討したい。

Ⅲ　クリス・パーク論文の概要

対象論文の構成は，表 1 の通りである。まず章ごとに内容を引用・要約したい。

１．対象論文の目的

（１）はじめに

パークは，冒頭で「英国における高等教育機関（HEIs）では，学部生の教育を支援するために，大学院生を活用することが増加している」が，そこで想定されている大学院生の GTA としての役割に問題があると指摘している。その上で，北米と英国の GTA を比較して，次のように説明する。

北米では,「GTA は，高等教育システムの中で地位と役割を認められた役職」と考えられている。また GTA の主目的は,「教育支援や意欲的な研究者のためのキャリアの第一段階を提供することであるであるが，大学院生に資金を提供することにもなっている」。それに対して英国では,「大学院生の主な役割は，依然として学生として研究すること」とみなされている。GTA の目的も,「第 1 に財政的支援を得るため」,「第 2 に教育経験を獲得するため」と理解されている。したがって，英国と米国では GTA の内実が,「重点（emphasis）と方向づけ（orientation）の点で異なり，大学院生の経験はこれらの間で大きく異なる」とまとめている。

このような違いを踏まえ，北米のシステムに学び，英国の高等教育機関の改革に教訓を得たいとしている。

（２）背景

「英国各地の多くの高等教育機関は，深刻かつ高まる資源の制約（資金，施設，人材など）ともに，増え続ける大学院生を教える課題に直面している」と述べる。このような課題を克服するために，北米でおこなわれている GTA モデルが役に立つと言う。

北米では，GTA の役割は「大講義で質問に対応する」ことだけに留まらないとして，パークは，GTA を大学が雇用するメリットを 3 つに整理している。第 1 は，大学教員の「授業負担を減らすこと，それによって研究者たちに研究時間が増えること」である。第 2 は，「大学院生に財政支援を提供すること」である。第 3 は,「将来の大学教員たちに実習モデルを提供すること」である。

表 1　クリス・パーク論文の構成

1：はじめに
2：背景
3：選定と養成
4：トレーニング
5：指導助言とメンタリング
6：実践的問題
7：個人的問題
8：職能開発上の問題
9：結論

（筆者ら作成。番号は筆者らによる。）

２．GTA の育成モデル

（１）選定と養成

GTA の選定について，パークは「プロセスは公平であり，透明性があり，一貫性がなければならない。その結果は，GTA の有効性とその結果としての学生の学習に重大な影響を及ぼす可能性がある」と述べる。具体的な選定の基準として,「科目に関する適切な知識と学部教育での専門領域」,「過去のトレーニングや教育経験，また非母語話者のために書き話す能力」を抽出している。この他にも,「力量のある GTA」が有する能力として，ストレスに対応できる力や「授業で建設的なディスカッションを実施する方法」等を挙げている。

また，GTA にとって重要な能力を 26 に整理した研究として，Simpson と Smith（1993）に言及している。

選定された GTA の養成は，「学科レベルと研究科レベル」の両方で，「周到に構成された適切な活動プログラム」が要求されるという。「養成とは，（指導教員から）発見される経験であり，また同時に（学生から）学習される経験でもあるため，彼らは自身が大学院生であると，同時に教師であるということに気づかされる」と指摘する。また，パークは，Staton と Darling（1989）による「GTA として形成された技能，行動，態度が，将来の研究者としての成長に大きな影響を及ぼすために，この早期の社会化はきわめて重要」という主張を引用して，GTA 養成の意義を強調している。

またパークは，英語を母語としない外国籍の GTA に，「英語を用いた指導の力量についての自信」を持たせるためにも，養成プログラムは有効であるとしている。

（２）トレーニング

トレーニングとは，「実践と指導によって合意された能力基準に GTA を到達させることを意味する」。「大部分の北米の GTA 論文は，この重要なテーマの研究にあてられている」と指摘する。その上で，「多くの北米の大学は，教えることは学ぶことであり，学ぶことは実践することであり，それが継続的な改善になりうるとの前提にもとづいて GTA のトレーニングプログラムは開発されている」と言う。

北米の GTA トレーニングプログラムは，「常勤の専門的なトレーナー」が担当しているが，「ロールモデルとして経験豊かな教師たち」を活用したり，「仲間同士のメンタリング」を取り入れたりしている点に特徴があると指摘する。

また北米では，「効果的な GTA 指導プログラムのデザインが注目されている」と述べ，これらのプログラムには，共通に「教室での実習，課題への取組，モデルづくり，教授・学習過程の観察などアクティブラーニングの方略が含まれる」ことを挙げている。その他にも，「論文の読解と分析」「教授経験に関する議論」「形成的評価と総括的評価の機会の提供」などの方略を抽出している。またこれらの「GTA トレーニングプログラムの有効性は，授業の評価，学生のフィードバック，自己評価などの多様な方法で評価される」という。なお，これらのトレーニングプログラムでは，いずれも「汎用的な教育技能を志向している」。なぜなら「多数の GTA 志望者にトレーニングを提供する上で費用対効果が良いだけでなく，全ての GTA はコアスキルに関する十分な基礎を持つべきだから」と説明する。しかし「GTA のトレーニングが，「１つの手法で全ての用を足す」ことは絶対に不可能であり，その適切な形態と量は，学生と彼らの背景に固有な要因にもとづいて形づくられるべきである」とまとめている。例えば，留学生の大学院生は，「言語の違いや文化的な多様性，感受性に由来する課題」をもっているため，「固有の研修ニーズ」があると指摘している。

（３）指導助言とメンタリング

パークは，「北米における GTA の教育は，一般的に彼らと強く結ばれたコースリーダーによって監督されている。ピア・メンタリング（新任 GTA と経験豊富な GTA の組み合わせ）もまた，きわめて有益な支援や指導を提供できる」と説明する。「指導教員（Supervisor）とメンターは異なる役割」を担っている。その役割とは，指導教員は「マネージャーとディレクターとしての業務」であり，メンターは，「ロールモデルやピア・サポーターとしての業務」である。

とくに「GTA の指導教員の役割は大抵複雑で難しいものであり，同時に指導教員と学生間の効果的な対人関係があってこそ実を結ぶものである」としている。GTA にとって，「指導教員のフィードバックと意見がとても有効であるにも関わらず，指導教員は GTA のパフ

ォーマンスとその有効性を評価することに拘っている」との課題も指摘している。

３．GTA の成長・育成における課題

（１）実践的問題

パークは，GTA に認められる実践的な問題として,「GTA の知識不足」「服装」「コミュニケーション」「教育と研究のバランス」を挙げる。ただ，これらの「様々な実践的問題は，GTA がその役割を適切に果たすことで，うまく対処されなければならない」。

実践的な問題の中でも，一般的にはコミュニケーションに関する課題が，具体的には，学生との対話，GTA 仲間（Peers）に溶け込むこと，そして彼らの指導教員や他の研究仲間（academic colleagues）との仕事上の付き合いが，深刻だという。

コミュニケーションの問題は,「外国籍の GTA にとって主要な関心事」であり，外国籍の GTA に対するフォローは,国際化の上で重要な課題になっていると注意を喚起する。

さらに重要な課題として，GTA としての「教育の義務」と，博士号取得のための「研究への従事」のバランスを挙げている。これは，パーク自身の調査結果にもとづいて，よく見られる現象だと指摘している。

（２）個人的問題

個人的問題に関しては,「有用性とアイデンティティ」を指摘している。

有用性とは，GTA を務めることで得られる意義のことであり,「自己省察と反省的実践」で克服できるという。そのためのツールとして,「日記または日誌を書くこと」や「授業時間を録画したテープの分析やアイデアの共有,同僚とメンターからのフィードバック」等の方法が示している。また「有用性は経験とともに必然的に高まる」という。なぜなら,「多くの大学は，職人的アプローチ（journeyman approach）を採用しており，GTA は継続的な経験を積むにしたがって，責任，独立，自立をより与えられるから」だという。

アイデンティティに関して,「GTA は, 学生と教室で接する試練の過程で，彼らの見方，信念と考えが試され，洗練され，しばしばアイデンティティと自尊心の観念に係わる問題に直面する」としている。例えば, Lal（2000）を引用して，性・人種・文化の問題を例示している。

（３）職能開発上の問題

北米の GTA に関する多くの文献は,テーマに職能開発上の問題を扱っている。それは,「学生かつ新米教師である」GTA の不安定な立場に由来すると言う。また「多くの GTA トレーニングプログラムは，徒弟的な学習モデルにもとづいている」が,「これは全ての GTA が大学教員としてのキャリアを切望している場合においてのみ，真に妥当である」と指摘している。

このような制約こそあれ,「学界に教育者として，かつ研究者として残ることを志向する GTA」に対しては，以下の助言が有効と提言する。第１に，教えることの哲学（teaching philosophy statement）を語ること。第２に，研究者としての評判を高める（developing a professional reputation）こと。第３に，アカデミック・キャリアへの効果的な就職活動の方略を用意することである。

なお,「GTA は, 教員であると同時に学生であり，さらに被雇用者であり見習いでもあるという，いささか不明確でニッチな地位にある」と述べ,「彼らは他者から『得体の知れないもの』と見られたり，彼ら自身そう捉えたりするのも無理はない」としている。このような悩みは，頻繁に生じるものであり，これが「GTA の労働組合化」に繋がったという。労働組合は,「GTA と彼らの雇い主との関係」を変化させたが,「GTA に利益ももたらした」と結論付けている。

４．対象論文の結論

パークが，北米の GTA 活用に関する文献レビューから引き出した重要な教訓は，「GTA の雇用のための首尾一貫した枠組み」の必要性である。この結論を受けて，パークは論文末に「北米の経験から引き出された教訓のまとめ」を 31 箇条に整理している。

具体的には表２の通りである。これらを GTA 制度に取り入れたならば，本制度は教員以外の「ステークホルダー（学科，大学職員，大学院生と学部生）にも享受されるだろう」と期待する。パークの結論は，GTA を活用することで，「多くの学部生に指導が行き届くこと，研究活動のために教員の教える時間を緩和すること，研究を行う学生に財政支援の機会を増やすこと，そして将来の大学教員のために実習を提供すること」にまとめられる。

Ⅳ　大学院生の学習システムとしての GTA

終わりに，パークがおこなった考察と彼が引き出した教訓に基づいて，冒頭の RQ に答えていく。なお，以下，本文中の括弧の前に付した番号は，表２の番号に対応している。

１．大学院生は，GTA として学習する過程で，どのようなつまずきに直面するか

第１に，「他者との関係構築」での困難である。ここでいう他者とは，学生や同僚 GTA，指導教員を意味する。研究者としても教育者としても新参者であり，曖昧な地位に置かれた GTA にとって，周囲と適切な関係を築けないと，ストレスの源となりうる。このことは，表２の 14-17 や 30 とも関連している。

第２に，「研究と教育の時間配分」に係わる困難である。一定期間内に博士号を取得しようとする大学院生にとって，時間は何よりも貴重だ。教育にも研究にも真剣に取り組もうとする GTA ほど，バランスの課題に悩まされるのではないか。

第３に，「知識」や「経験」の不足に由来する困難である。18「大学の資源・資産に関する知識」，19「学生との間の揉め事」，20「コミュニケーション能力」に関する困難は，その典型である。はじめて授業を担当し，学生を指導する GTA にとって「分からない」「できない」事態は，深刻に違いない。

第４に，GTA のアイデンティティに起因する困難である。例えば，パーク論文には，「白人・中流階級の女性解放論に批判的な有色女性の作品」に接した GTA の葛藤が紹介されている。自己の信念や文化的・倫理的な立場に反する見解であっても，教育者として多様な見解に開かれた姿勢を示すことは，頭で考えるほど容易なことではない。

この他にも，英語を母語としない留学生の GTA は，とくに言語運用能力や文化的背景で悩むことが随所で指摘されている。

なお，これらの困難の多くは，研究者・教育者として職を得た後にも直面しうる普遍的な課題であり，必ずしも GTA に限ったつまずきとはいえないだろう。

２．つまずきの克服は，どのようなプログラムで支援することが可能か。

先述のように GTA は，たくさんの困難に直面するが，それを克服するプログラムもまた GTA の制度に他ならない。ただ GTA が単なる経験を提供するだけの場になっていると，つまずきが蓄積していくだけになる。しかし，パーク論文が見出した教訓とは，GTA のプログラムは，研究者・教育者のコミュニティへの正統的周辺参加の機会を提供するものでなければならないというものであった。またそのための，「選定と養成」「トレーニング」「指導・助言とメンタリング」の仕組みづくりが要請されていた。

具体的には，GTA は，1「アカデミック・ヒエラルキー」に明確に位置づけられた身分であり，目指すべきロールモデルとして 14「経験豊かな教員」が存在する。教育者として活動するには，あらかじめ 13「汎用的な要素と科目固有の要素」についてトレーニングを受

表２　北米の経験から引き出された教訓のまとめ

概要（Overall）

1. GTA は単に教える大学院生にとどまらない。GTA は，アカデミック・ヒエラルキーにおいて，敬意を持って，はっきりと認知された特定の地位として受けいれられている身分である。
2. 北米の大学は，しばしば力量ある GTA を育成するシステムについて長い経験を有しており，その大半は有益であるので，英国における高等教育機関はこの GTA システムの経験から大いに学ばなければならない。
3. 学部生を指導するための GTA の雇用は，以下の点を含む様々な利益をもたらす：
   - 研究者が指導する負担を減らし，研究する時間を増加させる。
   - 研究者としての大学院生の，安定的で持続的な財政的支援になる。
   - GTA にとって関連のある指導の経験をもたらす。
   - 将来の大学教員に向けた徒弟制的なモデルとなる。
4. GTA が自身の指導上の役割を効果的に果たすことができるように保証するためには，入念に設計されたシステムと手続きが求められる。
5. 適切にトレーニングされた GTA は，実験室での実演，実習や野外授業，個人指導や集団セミナーの指導，そして（とくに学部生の入門的コースにおける）講義を含む多様な文脈での業務を遂行できる。
6. 持続可能な GTA モデルの設計においては，一人の独立した大学院生にとって，教育に費やされる時間と研究に費やされる時間との間で繰り返し葛藤が生じることを認知し，このことに配慮しなければならい。これは，仕事のやりがいや研究の完遂，学位論文の提出とその完成度にとって重要な意味を持っている。

（GTA の）選定と養成

7. GTA 選定のプロセスは…：
   - 公平で，透明性が高く，首尾一貫して適用されるべきである。
   - GTA の効果とそれに伴う学生の学びに影響をおよぼす。
8. GTA を選定する際の基準は…：
   - GTA が果たすことを期待されている業務に適合しているべきである。
   - 科目に関する知識と事前のトレーニングや指導経験（の有無や程度）を含むべきである。
   - 非母語話者の言語運用能力を含むべきである。
9. GTA に期待される諸能力が定義され，それが GTA 選定プロセスの一部に含まれるべきである。
10. GTA の養成プログラムは，以下の点に配慮して周到に設計されなければならない：
    - 職務としての GTA の養成において，大きな支援となりえること。
    - 強制的で，報酬を伴わない要素が含まれるおそれがあること。
    - 方向づけ（orientation），導入（induction），同化（assimilation）を含む多段階的なプロセスであること。
    - 外国籍の GTA の自信が有意に高まり，それに伴い潜在的な効果も高まる可能性があること。
    - 支援的なコミュニケーションができる関係を構築し，持続させることを目標とすべきこと。
11. 適切に準備された GTA は学部における有効な「ティーチング・コミュニティ」の発展と持続に一役買うだろうし，そのことは学部に活力を加え，学習経験の強化につながる可能性がある。

トレーニング

12. 教えることは学ぶことであり，実践することであり，それは絶え間ない改善となりうる。
13. GTA のトレーニングプログラムは，以下に点に配慮して周到に設計されなければならない：
    - 教えるものと教えられるもの双方にとっての学習経験を強化すること。
    - 汎用的な要素と科目固有の要素の両方を含むこと。
    - アクティブラーニングの方略，構成主義的な学習方略，社会的相互作用を促すようなアクティビティ，動機付けの方略を含むべきであること。

・形成的評価と総括的評価の両方を含むべきであること。
・適切なニーズの評価プロセスにもとづいて形づくられるべきであること。
・言語の違いや文化的な多様性や感受性を持つ外国籍の GTA に特別な用意をしておくこと。
・公式のトレーニングプログラムだけではなく，現在行われている活動や機会にも関わるべきであること。
・適応と改善を通じて，時間をかけて徐々に進めていくべきであること。

14. 経験豊かな教員は，トレーニングされる GTA にとって，きわめて大きな影響力を及ぼすロールモデルとなりうること。
15. ピア・メンタリングは，GTA のトレーニング過程で大きな支援となりうること。

指導助言とメンタリング

16. GTA の指導・助言者は…：
・伝統的にコースのリーダーである。
・適切な支援を受け，勇気づけられるべきである。
・定期的に他の GTA と交流するべきである。
・指導助言は，上から目線のスタイルよりも，同僚的な関係であるべきである。

17. ピア・メンタリングは，GTA に有益な支援や助言を提供する可能性がある。

実践的な問題（Practical issues）

18. GTA は，活用可能な大学の資源・資産に精通し，学生に対しても，それについて教えることができるべきである。
19. GTA は，（とくに教える対象である学生との間に）生じる緊張（conflict）に有効に対処できる必要があり，この要素は GTA のトレーニングの一部に含まれるべきである。
20. GTA の前に立ちはだかる多くの葛藤は，コミュニケーションの問題に関わるものであり，この要素は GTA のトレーニングの一部に含まれるべきである。
21. 外国籍の GTA にとって，コミュニケーションの問題は，とりわけ重要である。
22. GTA のために，教育と研究の適切なバランスに留意しなければならない。

個人的な問題（Personal issues）

23. GTA の効果は自己省察と反省的実践を通して改善されうるし，それが自己認識（self-awareness）を高める。
24. 適切な省察的活動を用いることで，GTA は実際上の指導スタイルと理論上の指導スタイルとのずれを評価することが促されるべきである。
25. GTA は，学科が求める条件との文脈で，個人としての目標を絶え間なく見直すことが促されるべきである。
26. GTA は，しばしばアイデンティティと自尊心の観念に関わる問題（とくにジェンダー，人種，文化に関する問題）に直面する。

職能開発上の問題（Professional development issues）

27. GTA の経験は，大学教員志望者にとって有益な準備となりうる。
28. 研究に従事する大学院生として質の高い指導助言を行うことは，選択肢の 1 つとしてアカデミック・キャリアを考えている GTA に，肯定的な影響を与える可能性がある。
29. 将来の大学教員養成（PFF）プログラムは，GTA を学生から大学教員へと転換を図ることを促し，またそれを可能にする可能性がある。
30. GTA は，しばしば，学生であり，教師であり，被雇用者であり，見習いであるという自身の曖昧な地位に起因する困難を経験する。
31. GTA の労働組合化は，GTA と彼らの雇用者との関係を変化させる。

（クリス・パーク論文より筆者らが引用・翻訳。原文中では，Table 1 となっている。）

ける必要があり，適宜 15「ピア・メンタリング」を通じて課題解決を支援する。また，たえず 23「自己省察と反省的実践」を求めることで GTA としての成長を促し，その効果を評価させるように構想されていた。

３．とくに（教育の）研究者と（教師の）教育者の２つの顔をもち，両者の責任を同時に果たすことが求められる教科教育学を専門とする大学院生にとって，GTA の経験はどういう意味を持つか。

教科教育学を専門とする大学院生にとって，GTA の経験は，教育者（教員養成・教員研修）としての資質・能力はもちろん，研究者としての資質・能力も高める機会を得ることもできる。なぜなら教科教育学は，学術研究と教育実践が不可分の関係で成立している（池野，2014b）（草原ら，2014）からである。

教科教育学を学ぶ大学院生は，大学に研究者として採用されると，ほぼ同時に教師教育（教員養成）のシステムに組み込まれる。博士課程を終えたばかりの大学院生は，教員養成という未知の世界に放り出され，やむを得ず自らの被教育経験を拠り所に指導を展開する。中原ら（2006）は，「ある１人の被教育経験」に裏打ちされた「私の教育論」が人材育成のモデルになることを危惧するが，これは正鵠を射た指摘であろう。GTA の経験はまず何よりも，教育者（教員養成者）としての資質・能力を高める機会を提供する。

GTA の経験は，教育者（教員養成者）としての資質・能力に限らず，研究者ならびに教育者（教員研修者）としての資質・能力を高める契機ともなる。なぜなら，①授業を開発・実践し，②授業を分析・評価し，③授業を改善する。これら一連の「養成」に求められる資質・能力と，「研究」や「研修」に求められるそれとは，ウェイトこそ異なれど重なるところが大きいからである。大学生を対象にして実践・「養成」＝①（②③）を行うのか，小中高の教育実践を対象にして「研究」「研修」＝②③（①）を行うのか，の違いはあれども，そこに要求されるものは，ほぼ同質だからである。

教育者と研究者，それぞれの方法論が深く分かちがたく結びついている教科教育学を学ぶ大学院生にとって，GTA としての学びには一定の効果が期待できる。事実，後藤（2012），岡田・草原（2013）（2014），棚橋・渡邉・大坂・草原（2014）らの成果は，GTA として大学の教育実践に段階的に参与していく真正の学びが，教育者と研究者としての資質・能力を高めることを示唆している。

今後は，先行研究の成果に学びつつ，研究室や講座の壁を越えて了解できる，教育学・教科教育学の GTA が達成すべき目標を体系化すること，また彼らが（教育の）研究者，（教師の）教育者のコミュニティに正統的に参加していくことを保証する教育プログラムを開発し効果を検証することが，課題となるだろう。その意味において，2000 年代前半に英国の「研究大学」が直面した課題とそのソリューション，そしてパーク論文が引き出した北米の経験からの「教訓」は，我々に示唆するところが大きい。

註

1）当日の発表内容は，以下に詳しい。Bellows,E.（渡邉巧・大坂遊訳）（2014）「アメリカ合衆国における力量ある教師を育てるための協働的試み」池野範男代表『学習システム促進研究センター（RIDLS）講演会シリーズ』No.1，pp.38-49。

2）フィールドとベローズによる教師教育実践は，以下の論文で考察されている。田口紘子（2012）「米国の社会科研究の方法論的特質：テキサス大学オースチン校「小学校社会科教育法」を事例にして」『社会科教育論叢』第 48 集，pp.77-86。

3）Teaching in Higher Education 誌の編集代表者５人のうち４人は英国関係者，編集委員

の 82 名のうち 69 名は英国ならびに英国と関係の深い旧英連邦の関係者である。

参考文献

＜和文＞

荒木淳子（2008）「職場を越境する社会人学習のための理論的基盤の検討－ワークプレイスラーニング研究の類型化と再考－」『経営行動科学』第 21 巻第 2 号，pp.119-128。

安藤厚・細川敏幸・山岸みどり・小笠原正明編著（2012）『プロフェッショナル・ディベロップメント－大学教員･TA 研修の国際比較－』北海道大学出版会。

池野範男（2014a）「教育研究の類型と特質」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.50-55。

池野範男（2014b）「日本の教科教育学研究者とは何をどのようにする人のことか－教科教育学と教師教育－」『日本教科教育学会誌』第 36 巻第 4 号，pp.95-102。

上野哲・大橋隆広編（2010）『「Ed. D 型大学院プログラムの開発と実践－教職課程担当教員の組織的養成－」最終報告』広島大学大学院教育学研究科。

宇田川拓雄（2006）「カリフォルニア州立大学バークレー校における TA システム」『高等教育ジャーナル』第 14 巻，pp.129-141。

小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤（2006）『TA 実践ガイドブック』玉川大学出版部。

岡田了祐・草原和博（2013）「教員志望学生にみる社会科授業分析力の向上とその効果－社会系(地理歴史)教科指導法の受講生を手がかりに－」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第 62 号, pp.61-70。

岡田了祐・草原和博（2014）「教員志望学生にみる社会科カリキュラム分析力の向上とその効果－社会系（地理歴史）カリキュラムデザイン論の受講生を手がかりに－」『広島大学大学院教育学研究科 第二部（文化教育開発関連領域）』第 63 号, pp.49-58。

苅谷剛彦（1992）『アメリカの大学・ニッポン大学』玉川大学出版部。

河井正隆（2000）「大学院生の教員トレーニングに関する事例的研究－Teaching Assistant 制度からの考察－」『大学教育学会誌』第 22 巻第 1 号，pp.63-71。

北野秋男（2002）「ティーチング・アシスタント（TA）制度と大学の授業改善－日本大学文理学部の事例を中心に－」『大学教育学会誌』第 24 巻第 2 号，pp.91-97。

北野秋男（2003）「ティーチング・アシスタント（TA）制度の総合的研究－全国の 22 大学に対するインタビュー調査の結果を中心に」『大学教育学会誌』第 25 巻第 2 号, pp.75-82。

北野秋男編著（2006）『日本のティーチング・アシスタント制度－大学教育の改善と人的資源の活用－』東信堂。

教育・国際室教育支援グループ編（2014）『ティーチング・アシスタント（TA）ハンドブック』広島大学人材育成推進室（FD 部会）。

吉良直（2008）「アメリカのティーチング・アシスタント制度と訓練・養成制度の研究－北東部 5 大学でのインタビュー調査結果の比較考察」『大学教育学会誌』第 27 巻第 2 号，pp.88-96。

吉良直・北野秋男（2008）「アメリカの若手教育者・研究者養成制度に関する研究－日米比較の視点から－」『京都大学高等教育研究』第 14 号，pp.25-35。

吉良直（2014）「大学院生のための段階的な大学教員養成機能に関する研究－アメリカの研究大学から日本への示唆－」『教育総合研究』第 7 号，pp.1-20。

草原和博・渡部竜也・田口紘子・田中伸・小川正人（2014）「日本の社会科教育研究者の教科観と方法論－なんのために，どのように研究するか」『日本教科教育学会誌』第 37 巻第 1 号，pp.63-74。

後藤賢次郎（2012）「学部生の社会科教育観の変容に関する一考察－社会科教員養成科目（教科の指導法（社会））における TA 実施記録をもとに－」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第 61 号, pp.57-66。

古宮昇（2001）「将来の大学教員に教え方を教える：米国ミズーリ大学コロンビア校心理学部における教育実習」『大学教育学会誌』第 23 巻第 1 号，pp.63-70。

子安増生・藤田哲也（1996）「ティーチング・アシスタント制度の現状と問題点：教育学部教育心理学科のケース」『京都大学高等教育研究』第 2 号，pp.77-83。

子安増生・藤田哲也・前平泰志・山口健二（1997）「京都大学教官を対象とするティーチング・アシスタントに関する調査(1)：質問紙調査のデータ分析」『京都大学高等教育研究』第 3 号，pp.64-76。

今野文子・三石大（2008）「スタンフォード大学における TA 制度と訓練プログラムに関する調査報告」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 3 号，pp.203-212。

西城卓也（2012）「正統的周辺参加論と認知的徒弟制」『医学教育』第 43 巻第 4 号, pp.292-293。

田口紘子（2012）「米国の社会科研究の方法論的特質：テキサス大学オースチン校「小学校社会科教育法」を事例にして」『社会科教育論叢』第 48 集，pp.77-86。

棚橋健治・渡邉巧・大坂遊・草原和博（2014）「教員志望学生の社会科授業プランになぜ違いが生じるのか－教科指導力の育成のあり方に示唆するもの－」『学校教育実践学研究 』第 20 巻，pp.125-139。

玉村福太朗・向後千春（2008）「日本のティーチング・アシスタントの意識と実態」『日本教育工学会研究報告集』pp.207-214。

中原淳編著（2006）『企業内人材育成入門－人を育てる心理・教育学の基本理論を学ぶ－』ダイヤモンド社。

前平泰志・山口健二・子安増生・藤田哲也（2008）「京都大学教官を対象とするティーチング・アシスタントに関する調査(2):自由記述内容の分析」『京都大学高等教育研究』第 14 号，pp.77-85。

和賀崇（2003）「アメリカの大学における大学教員準備プログラム－ファカルティ・ディベロップメントとの関連に注目して－」『大学教育学会誌』第 25 巻第 2 号，pp.83-89。

Bellows,E.（渡邉巧・大坂遊訳）（2014）「アメリカ合衆国における力量ある教師を育てるための協働的試み」池野範男代表『学習システム促進研究センター（RIDLS）講演会シリーズ』No.1，pp.38-49。

Clarke,G.（吉川裕美子訳）（2007）「イギリス高等教育における質保証」『大学評価・学位研究』第 6 号，pp.1-24。

Field,S.L.（大坂遊・渡邉巧訳）（2014）「社会科教師教育と大学院生ティーチング・アシスタントの効果的な育成」池野範男代表『学習システム促進研究センター（RIDLS）講演会シリーズ』No.1，pp.8-13。

Lave,J.,&Wenger,E. (佐伯胖訳) (1993)『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』産業図書。

Park,C.（犬井正訳）（1994）『熱帯雨林の社会経済学』農林統計協会。

＜英文＞

Lunenberg M., Dengerink J., and Korthagen F.（2014）The Professional Teacher Educator：Roles, Behavior, and Professional Development of Teacher Educators, Sense Publishers.

Marincovich, M., et al.（Eds.）（1998）The Professional Development of Graduate Teaching Assistants, Bolton, MA: Anker Publishing Company, Inc.

Park, C., and Ramos, M.（2002）The donkey in the department? Insights into the Graduate

Teaching Assistant（GTA）experience in the UK. Journal of Graduate Education, 3, pp.47-53.

Park, C.（2004）The Graduate Teaching Assistant（GTA）: Lessons from North American Experience. Teaching in Higher Education, 9（3）, pp.349-361.

著者

渡邉 巧　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

大坂 遊　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

草原 和博　広島大学大学院教育学研究科

本論文は，Theory and Research for Developing Learning Systems，Vol.1 所収の英語論文“Graduate Teaching Assistant Work as a Learning System and its Significance”の日本語訳論文である。